

# 世界史学の問題

## A・J・トインビーの紹介を兼ねて

### 序論

歴史学は單なる歴史学でなくて、世界史学でなければならぬ。ということとは今日誰しも肯定し得ることだろうと思う。然らば現代の歴史学はどのような状態にあるのであろうか。これから私は此の問いに対する返答の一部として、英國の生んだ歴史家A・T・トインビーを紹介したいと思う。二十世紀最大の歴史家と稱されている彼については、周知のことだろうと思うし、また紹介といつてもその力を持たないものであるけれども、最近読んだ *Civilization on Trial* (1948) を中心として私の考えを纏めてみたいと思う。こゝで私は世界史觀の変遷を主として取扱つてゐる。先づ最初私は世界史学は如何にして成立するかという問題の考察から始めランケに入つた。そしてランケ史学を突き抜けて、実践的な歴史学を樹立せんとする動きが第一次大戦後から第二次大戦前に見られたことを述べ、第二次大戦後の世界史学を代表するものとしてトインビーの立場を明らかにしよう

している。もしこの小論が世界史觀の移り行きに於ける現代歴史学の位置を知る上にさゝやかなる役割を果してくれたとしたら、その名譽は私の弱き肩には負いかねるものがある。

### 本論

―世界史学は如何にして成立するか―

問題の中心点に入る前に、我々は先づ最初世界史学はどのようにして生れるのか。という問いから出発しなければならぬ。第一に気付くことは、歴史学を世界史学たらしめるためには、先づ「世界史」が存在しなくてはならないということだと思ふ。世界史の存在しないところ、如何なる歴史学も世界史学たり得ないことは明らかである。しかし世界史の存在を可能ならしめるためには、その *Ground* としての世界が存在しなくてはならないということが考えられる。然らばこの場合、世界の存在とは我々にとつて何を意味するのであろうか、つまり世界が存在するというのは、世界が漠然と空間的に存在す

藤谷弘懿

ることを言うのではなくて、世界が世界として自覚されたか否かに関っているのである。此の世界は、それが世界とし自覚されたところに於て初めて世界史の成立を可能ならしめるところの世界となるのである。それ故私は世界史学が成立する要件の第二番目として自覚された世界の存在ということを上げたいと思う。

こゝで、私は今問題として取扱っているところの「世界の自覚」が何時頃からあったのかということについて少し考えておきたい。世界の自覚つまり人々が西欧とか東洋とかというものから離れて、有機的な世界の存在をはつきり認識したのは極く最近になってからだといえる。

Erich Brandenburg も「最近われわれは……一大演劇を経験した世界史の成立ということがそれぞれである。……地球上のあらゆる部分の政治的關聯が非常に緊密になったために世界の一部で起ったことも他の地方にその反響を呼ばずに済むことがなくなったのである、その時以来初めてわれわれは一つの世界史を持つのである」とその著

*Europa und die Welt* (1937) の中で述べているが「世界の自覚

しつまり世界史の成立は少くとも「十九世紀の終りの二、三十年以後」(Brandenburg) に於てあると考えてよからう。然し、結局嚴密な意味からいう場合には、世界史の成立は第一次世界大戦以後だと考えるのが妥当ではあ

るまいか。というのは、大戦前に漸次明確化されつ、あつた「世界の自覚」が戦争という關心事によつて、はつきりと表面化されたからである。私は世界史が成立したのは第一次大戦以後に於てあると主張したい。

さてこゝ、までに私は世界史学が成立する要件の一つとして世界史そのもの、存在が必要であることを述べ、そのためには世界の空間的拡大という外因的な理由を考え、てそれに伴う自覚された世界の存在が必要であることを述べた。然しアメリカ大陸が発見されたり、東西兩洋の間に貿易が開かれたり、更には「地球上のあらゆる部分の利害に關する政治的關聯が非常に緊密」になつて、世界が一つの有機的全体となつても未だ「世界史学」は成立しない。空間的拡大ともう一つ、歴史学それ自体、世界史学となる可能性をその中に持っているものではないだらうか。歴史学の対象が「かつて現実世界に生起した過去の諸現象の探究と敘述である」(Eduard Meyer: *Zur Theorie und Methodik der Gesch. etc.*) 又は「現実に世界が一つになつた」という現象が起つた以上それを探究し敘述する歴史学が、或る国で起つた地方的な事件をも矢張り世界全体の關聯の中に於て起つた事件として把握しなければならなくなるであらう。こゝに於て私は歴史学が本来的に世界史学たるべき性質を持つてゐることに気付くのである。

ところで世界が自覚されないところに世界史はなく、世界史のないところに世界史学は存在しないという考えに立つて世界史の成立が第一次世界大戦以後だとするならば、第一次世界大戦以前には歴史学はあつても世界史学は存在しなかったということになる訳である。然しはたしてそうであつたろうか。

#### — Ranke の場合 —

その最も著名な例としてランケの場合はどうであつたろうか。彼は古くから世界史学家であるといわれているし、自らもそれが未完成に終つたとはいへ、晩年には「Welt-ge-Schichte」という著作を発表しているのではないか。「私は」と彼は言っている「夙くから世界史の理念をば抱懐して片時もそれを眼界から見失つた時はなかつた」(Epochen; Doves youth)。私は先程第一次世界大戦以前には世界史は存在しなかったことを主張した。そして歴史学が本来的に世界史学となるものであることを述べた。もしも、こういった時期的拡大や空間的拡大によつてのみ世界史学が成立するものであるとするならば、ランケの世界史学は世界史学の範疇外に置かれねばならなくなる。そしてまたランケ以後の歴史家はランケ以上の世界史学家でなければならぬであらう。然るに私は「ランケ以後に歴史家はいるけれども世界史家はいない」

という言葉(『歴史学』、1911年、第1巻、第1章)に深い反感を覚えるのを禁じ得ないのである。それでは一体この矛盾は何処から来るのであらうか。此の矛盾を解決する鍵は歴史学を把える歴史家の態度そのもの、中に求められるのである。歴史学を世界史学にまで高めようとしたのがランケの根本的な態度であり、ランケが世界史学家である所以でもあるのである。次に私はそのランケの態度について考えを馳せたいと思う。

Maun は世界史学が成立する要件の一つに「世界史認識への特別な志望」(Speziell-Universal-historisches Erkenntnisstreben) (Ranke's Begriff der Welt-<sup>1926</sup> Geschichte) とを上げているが、これはランケの言う「歴史家はその眼を普遍に向つて (Für das Allgemeine) 見詰めていなければならぬ」ことなのだと思う即ち全体を求める精神、意味の上に於て統一的に捉えんとする志向。これこそランケをして偉大なる世界史家たらしめたものであつた。世界史学は世界が單に時期的空間的に拡張されたところから必然的に生じて来るだけのものではなくて、世界史を關聯性ある全体のもとに把握せんとする歴史家の態度と相まつて初めて世界史学となるのである。こゝに私は世界史学の成立する第四番目の要件を思出すことが出来る。確かにランケの世界史は、世界史としては余りにも



ヨーロッパ的世界史であつた。しかしながら、彼が世界史家であることは永遠であらう。つまりそれは絶えず普遍を見つめているという精神の深さによるものである。彼の言う「*Zusammenhang*」は因果關聯でなく、普遍的關聯（*Allgemeine Zusammenhang*）であつた。こゝからして彼の世界史が *die Welt Geschichte* ではなくて *eine Welt Geschichte* にと、まらなければならなかつた原因が明らかになるであらう。彼の考え方からするならば、世界史上のばら／＼な諸事實の單なる寄せ集めから世界史が形成されるのではなくて、個々の歴史的事實が普遍的な關聯を持つたものとしての、統一ある全体として把握されるところに於て成立するものであつたのであつて、その故に、西欧の歴史は普遍的な關聯を持つものとして把握することが出来たとしても、世界が未だ全体として有機的に關聯を持つことのなかつた當時にあつては、彼の立場からしてどうしても超え得ない、もしくは超えてはならない限界があつたのである。もしもランケがヨーロッパの歴史と普遍的な關聯を持たない東洋の歴史を彼の世界史の中へ採り入れていたとしたら、彼の眞価は無くなつていたに違いない。例えヨーロッパ的世界史であるともあれ、あくまで「意味」としての世界史を追求めたランケの態度そのものに於て、私は「ランケ以後に世

界史家はいない」という言葉を理解したのである。以上にわたつて述べたことを結論づけるならば、世界史学の成立する要件は第一に世界史の存在であり第二番目には世界の空間的拡大に伴う自覺された世界の存在である。第三番目には歴史学の本来的性格が世界史学たるべきものであること。それらに加えて歴史を把握する歴史家の態度を四番目として考えたのである。

「二十世紀初頭の世界史觀（実践的な立場の擴張）」——  
ところでランケの歴史学は彼の有名な言葉「*Ich will zeigen, wie es eigentlich gewesen*」(*Geschichte der romanischen und germanischen Völker*) から分るように、純粹認識の立場であつた。つまり未來を割り出すための既知ではなくて、それが本来如何にあつたかを識ることだけが歴史学の目的であつた訳である。少し話が横道へ逸れるかも知れぬが、ランケの態度は當時にあつては、歴史を「進歩」の概念によつて捉え、過去を斷罪に処することによつて現代を正当化し、現代の優越性を主張せんとしていた啓蒙主義的歴史觀に対する反駁を意味していた。

然しながら、歴史学が單に過去を識ることだけに止まつているものだとするならば、歴史は識られると同時に死んだものとなるのではないだろうか。限りなき保存、結果のない知識の單なる堆積にのみ終止し、我々の持つ



創造への意欲を妨げているのではないか。「過去の独裁」「歴史の過剰」。今世紀に入ると、かゝる *Nachgelasse* 的な考え方の響きがとみに大きくなって来た。或る人は十九世紀 *Historismus* の墮落とその危機を指摘した。*Kreis der Historismus* 1932) 「歴史は歴史に参加する人々にとつてのみ即ち未来に情熱を抱く人々のためにのみ」(*Valery*) 歴史であり、認識にとゞまらずして行爲や実践に つながらねばならないと主張された。*Masur* は「世界史は單に事實の集積でなくて実践的意欲に逼られながら認識と行爲との間に立つことである」と結論している。これが大体第一次大戦から第二次世界大戦までの世界史觀の大きなうねりであつた。先程上げたブランドブルクなどもこういった思潮のもとで歴史を書いた一人だと言える。結局ランゲの世界史學が識ることだけという觀想的な立場に徹するところから生れたのだとするならば二十世紀初頭の世界史學は実践的な創造者としての立場を樹立せんとしたものだつたということが出来る。

#### ― 第三次世界大戦以後の世界史學 ―

(トインビー)

歴史學があくまで現實にその立脚点を持つ學である限り、現實の変動によって大きな影響を受けることは事實である。第二次世界大戦の砲彈は世界を变革し、従来の

秩序を破壊した。更にその砲彈の破片は吾が歴史學にも大きな傷を与えずにはおかなかつた。現實の荒々しい移り行きのために歴史學はその足場をさらわれ深い *Nichelmann* に陥入ったかのように思はれる。ところで第二次世界大戦以前にあつた世界史學のうねりは中断されて、戦後の混沌たる状態から起つた歴史學は全く新しいものであつたであらうか。こゝに於て、私は、一人の歴史家の登場を願はなければならぬ。その歴史家は *Arnold Joseph Toynbee* (一八八九―) その人である。

トインビーの歴史觀を見てみた場合、第二次世界大戦前から続いて来た世界史觀の論理的過程が中断されてしまつたようには考えられない。然しながら、そうかといつて従来の伝統をそのまゝ受け継いでいるものでもない。というよりはむしろ伝統的な歴史觀に反対し、新しい歴史觀を樹立し違つた研究方法を提出している。この点で私は、彼の史觀をして現代の世界史觀を代表せしめることをはゞからぬものである。實際、私には *X* 眞の意味での現代的な(言い換えるならば若手の)世界史觀が如何なる方向に向つてゐるのかといふことは知ることが出来ない。けれどもとにかく彼の考え方について若干述べてその方向を探つてみようと思ふのである。

今更こゝでくゞしく申すまでもなく十九世紀はま

さに史学の世紀であつた。Niebuhr に繼ぐ Ranke によつて Wissenschaft としての歴史学の基礎が確立され Droysen, Sybel, Treitschke, Mommsen が續いて出て史學史上を賑はした。比較的最近に於て我々は Dittley だとか Troilack, Meinecke などに接して来たがこれらは皆ドイツ的な思惟の持主であつた。ところでこれから我々が接しようとしている Toynbee は、かゝる観点からみるならばまことに英國的な思惟の持主であると言ひ得よう。その点、前者との間に興味あるコントラストをかもし出している。「ドイツ流の史學的方法」というものが空くじを引いたからには、ひとつイギリス流の實驗主義を以て何とか始末がつかないものであらうかしという彼の言葉は一層その對比を明らかにしている。これは從來のドイツ的な歴史觀の流れに對し、一つの終止符を打つものであると考へてよいと思ふ。

此の英國的、實驗的、思惟は彼の歴史觀の根底に横はる大きな特質でもあるのであつて、言ひ得るならば、彼の全歴史觀はどこから發してゐるとさへ言えるのである。後程述べる如く、彼は歴史の中に何らかの法則的なものを見出そうとしている。然し彼の求める法則性といったものは、從來から考へられてゐるが如き法則性とはやや趣きを異にしているのであつて、こゝに於て彼は Spann-

ger と對立しなければならなかつた。Spengler の考へ方は、「甚だ獨斷的であり、決定論的であり明知光彩に甚だ乏しいものであつて、かゝる「一定不動の時間表」を持つもの」に對し何ら説明が与えられていないことに對し不満を抱いた。そして彼は實証的に法則性を探らんとして、遂には「經驗より語るものを信ぜよ (experience credo)」という言葉をはくのである。かういつたところ、我々は英國的思惟の主張を見出すであらう。

世界史學が空間的拡大換言すれば地域的拡大という所謂外國的な理由だけによつて成立し得ないことは先にも述べた。それと同時に、世界が意味の上に於て認識されなければならぬということも同様であつた。トインビーの場合「この世界はこれをひとつのまとまつた全体として捉えるわれわれの能力の程度に応じて可知となる」のだと述べてゐることからもわかるように、その歴史的視野の拡大という處に於て、將に劃期的なものがあるといつても過言でないと思ふ。それは單に所謂時間的空間的視野が拡大されただけに止まるものではなく、その方法論に於ても、民族學、言語學などの影響、更には心理學の援助によつて驚くべきほどの広がりをを見せてゐるのである。このことはトインビーの歴史觀の特色であると同時に、現代歴史學の大きな特徴の一つと考へてよか

ろう。つまり新しい科学の発達に相並んで歴史学の研究視野が一段と押し広げられたのである。

### ― 世界史的視野の確立 ―

世界史学の確立の第一歩を彼は先づ偏局的な英国史の輕蔑と、世界的なギリシヤローマ史の讚美をもつて踏み出した。そして、それが大いに脱脚していたとはいえ、未だ多分に西欧中心的存在であるヨーロッパの歴史学に対し断固たる反対の態度を示し、非西欧的な同時代人の過去の歴史が西欧の歴史と合一されてしまったことを主張している。世界史が成立した以上、歴史学はあくまで「世界の上に立つものでなくてはならないであろう。」「世界を一つの全体として観ずるだけの大局的な見方」に立てという彼の主張は、十八世紀に於て確立され、その後も拭い去ることの出来ぬものとなつて連綿と續いて来た伝統的ともいふべき *Methistorischer Europäismus* に対する雄々しい反駁であつて、これはまた「*The World and Europe*」の中に於ける、何ゆゑにこの表題を「*Europe and the world*」としなかったのかという解答と通ずるものともいふべく、西欧中心的な歴史観から完全に脱脚し眞に「世界」という観点に立つて歴史を觀じようとした彼の強い態度を示すものであると言へよう。我々 *Europa und die Welt* と *The World and Europe* の

期には大きな隔りのあることを理解せねばならない。ヨーロッパは最早やヨーロッパ自身の運命を決定することが出来なくなつたといふことは常に彼の念頭から去らないのである。

### ― 文 明 ―

十九世紀ロマンティック歴史学の求めた歴史研究の單位は「国家」とか「民族」であつた。国家は国家であればあるほどその中には世界が現れているものであつた。「世界史がもし民族史という確實な地盤から離れようとするればそれは哲学が空想かに墮ちてしまふであろう」(Rankin, *Welt Geschichte*) 先にも述べたような限界内で世界史を捉える場合、民族と云う具体的實在の中に世界という普遍を見出さんとした限りに於てランケの立場は正しい。然しながら眞に世界史の立場に立ち、そして又立つことの出来たトインビーの場合はこれとは全く反対であつた。「歴史的研究の可知の視野というものは決して国家的な枠の内部に見出すことは出来ない」。例えば我々がアメリカ合衆国の歴史を研究する場合にイギリス人が北米大陸に上陸した時から始めたとしても合衆国の歴史を理解することは出来ないであろう。それも可能ならしめんがためにはどうしてもイギリスの歴史まで遡らねばならない然しはにして何処まで遡り得るか。同様に或る



国の国境線以外に発生した事件を考慮外に置いてその国の歴史を理解することは不可能であろう。世界史上の諸事件がお互に深い關聯を持つてゐる以上或る国の内部に起つた事件をその国だけの地方的な事件として理解することは不可能である。世界史的觀念に立つならば或る国の歴史がその国の時間的空間的限界内では理解出来ないのはむしろ當然であると言はねばなるまい。そこでトインビーが求めたのは西欧キリスト教文明を初めとする文明全体であつた。即ち歴史を文明のかたちで眺めようとするのである。勿論彼にあつても国家というものは考えられてゐる。然し彼の考える国家は「文明の内部での第二次的な一時的な政治現象」に過ぎないものである。然しこの文明も又その時間的限界と空間的限界を持つてゐることを忘れてはならない。というのは結局文明も国家と同様、單数でなくて複数だからである。だから彼は文明を理解せんがために宗教のかたちを考えた、然しこの宗教も、現世にある宗教である限りには理解出来ないものである。何故かなら現世もつまるところ「天の王国」の一州に過ぎないのだから。それ故に「歴史学は神学まで移行すること」が考えられるのである。然し實際に於て彼が採上げた歴史研究の單位は先述した如く文明であつた。とはいへ彼が「天の王国」を考えたということ、

そのこと自体は非常に重要な意味を持つてゐるのであつて、それは彼が歴史を文明のかたちで捉えようとしたけれども文明があくまで「歴史研究の最小單位」であることとはつきり自覺してゐることからも知り得るのである。然らば何故に彼が歴史を文明のかたちで觀じようとしたのであろうか、私はそれを「戦争と階級とは個々の見本を滅ぼすことはできたとしても、種自身を滅ぼすことは出来なかつたのであります。個々の文明は去つては去り、去つては来ながらも文明一般は、そのたびごとに、一般者の新しい類例の中に自己を體現することに成功しました」という言葉の中に見出したと思うのである。個々の文明は崩壊しても文明一般は崩壊しないが故にである。そして更に彼が所謂「死滅せる文明」までも歴史の上へ取上げてゐるのは何故であるかという問題は次の「哲學的同時代性」の中で論議さるべき性質を持つものである。

#### 「哲學的同時代性」

我々は先に民族学、言語学、心理学などの新しい諸科学の歴史学に対する影響なり援助なりを見出したが自然科学の發展は歴史学の上に今一つの問題を提出した。それは時間觀念の中に見出される。トインビーの眼は天國にまで到り又それは西洋東洋は申すまでもなく広く未開地をも含んで世界全体を包括した。それが自然科学的な

面では宇宙にまで拡張されたのである。その結果出て来るのは時間論の大きな変化であつた。地質学や宇宙発生学によつて展開されるに到つた時間の尺度で計るならば我々人類の歴史というものは一瞬間にも等しいものではないだらうか。彼の言う「哲学的同時代性」の觀念はこのから発している。「年代記が何と言おうともツギデダスの世界と私の世界とは哲學的同時代であることが今ははっきり証明された」。

「哲學的同時代性」つまり宇宙的な時間から見ると前歴史的な時代も近世も、つまるところ何か一つの新しい企図に出ようとする一束の、互に並行した、同時代のしかも極めて最近のことで、互に過ぎないものと考えてよい、そうすれば「死滅せる文明」も結局は現代の文明として取扱ふことが必要となるのである。

かゝる「同時代」の觀念から歴史を見る場合それが決して「進歩」とか「発展」の概念で以つて捉えられはしない。というよりはむしろ進歩の否定から出発しなければならぬと思う。よし進歩が認められるにしてもそれはわれわれの社会的遺産における進歩であつて、人類の改善における進歩ではなかつたに相違ない。「何故とすれば、人間性そのもの、展開に於て、歴史時代の内部において、何らかの肉体的或は精神的進歩があつたと想

像すべきいかなる保証もないからである。このように彼が歴史を進歩とか発展の概念で捉えようとしていないことは明らかである。

### — 反 覆 —

彼は明確に述べてはいないけれども私には彼が歴史を未ては去り、去つては来るといつた一つの律動として捉えようとしているように思はれるのである。即ち「それは潰え去るかと思へばまた勢力をぶり返し、また潰走する」といつたような発作を交互に反覆しながら進行するところの座學運動である」とも言い得ようか。私はまた彼が好んで用いる「挑戦」し「反応」し「遭遇戦」などの言葉の中にも一種のリズムを感じとつていふと思うのである。去つては「来る」ところの文明の挑戦と今去る文明の反応。「挑戦」「挑戦」「反応」。「排戦」「反応」「反応」……。歴史はこういったリズムミカルな動きではあるまいか。歴史が律動である場合、我々はそこに一つの法則性を見出すことが出来るであらう。つまり各文明間の遭遇を比較研究することによつて我々は歴史の中に在る法則性を捉え得るに違ひない。然しこの場合法則性というのはあくまで歴史が持つてゐる法則性であつて我々が歴史に対して与えた法則性であつてはならない。即ち彼の強張する「比較研究」の結果に現れた実証し得る法則性でなけ

ればならないのである。哲學的同時代性という觀念に立つて、歴史を律動として捉えるならばそこから歴史は繰返すという考え方が出て来るのは想像に難くない「人間の意志の自由を信ずる最も頑強な信者でさえも、最も徹底した決定論者と同様に即座に認容するであろうような仮借なく反覆し正確に予知し得る出来ごとが多数あるのではないでしようか」と彼は言っている。然し彼の言っている「反覆」は單なる循環史觀的な反覆から區別して考えられなければならないと思う。律動が反覆性を持つことは事實であるとしてもその反覆性は循環という言葉によつて表はされるが如き *Statisch* なものでなくとも *dynamisch* なものを含んでいるのである。リズムは繰り返すことがあつてもその繰り返しに於て何らかの新しいものを生み出す可能性を持っているのである。過去に於て繰り返したから未来に於て必ず繰り返すものであるのでもない。こゝに於て「反覆」の意味が持つ必然性も否定される。過去の一連の失敗は次に来るべきもの、成功を保証するものでもないければ、次に来る者をもまた失敗すべく運命づけるのではないのであつて、つまるところ歴史に於ける反覆の要素はかえつて「創造活動の自由のための一手段」と考えられるのである。即ち我々が我々自身のカデ歴史に「先例のない変化」を与えることの出

来る道を開いていることが律動の持つ大徴ではないだらうか。歴史家は「過去の業績に照らしてみたうえで……最後に主役を演ずる可能性に最も富むが如き文明や國民の歴史というものを特に研究すべきである」という主張も結局は今述べたような根拠の上に立つものと言えるであろう。トインビーは「歴史の形態学」を組み立てようとしている。歴史の反覆性の主張をい、歴史の形態学的組立てといい、唯物史觀の立場に立つ者から見れば更にまぬるい感が深いかも知れない。もっともこの両者は根本的に立場が違つているのであつてそれを同一に論ずることは出来ないが私はトインビーの立場を是としたい。トインビーの云う「歴史の形態学」とか「反覆性」というものは論理の展開において未来は必ずこうあるべきものであるというのではなくてあくまで事實の「比較研究」によつて実証され得るものでなければないのである。それに加えてトインビーが唯物史觀を知つて、ということも考えておく必要があると思う世界史学はあくまで事實の上に立脚したものでなければならぬ。決して觀念から世界史学は生れないのである。私はこの点彼が歴史学としての正しい立場に立っていると思うのである。絶えず具体を求め世界史学を世界史の哲學から切離したランケの態度は今日でも矢張り意味あるものがある。



## 結 論

今までに述べた如くトインビーの歴史学の特質は新しい諸科学の影響及び援助のもとに歴史的視野が空間的に驚異的に拡大されたこと。時間的拡大はかえって哲學的同時代性という觀念を生み出し前歴史的な時代と歴史的な時代とを完全に結びつけ更には比較研究や律動によつて歴史の反覆性を主張し未来へ強く働きかけていることなどが考えられる。特に彼がヨーロッパ中心の歴史觀から脱脚して眞に世界史學の立場に立つたことは注意すべきである。「この世界はこれをひとつとまじまつた全体として捉えるわれ／＼の能力に依じて可知的となる」という自信をこめた彼の言葉は世界史が成立した二十世紀に於て初めて接することが出来た言葉ではないだろうか。我々は現代に大きな不安を感じている。此の不安を何とかして解決し脱脚し得ないものであらうか。それがまた彼の出發点でもあったのである。ドイツ的な思维方法では解決が見出されなかつた時「イギリス流の実験主義で以て何とか始末がつかないものであらうか」という言葉と共に彼が出て来たのである。それは又現代の要求に応じたものであるとも言ひ得よう。少くとも現代の世界史觀は英國的な思维方法によるものへと傾いている。それが如何にして現代の悩みを解決して行くかは今後の

問題であるとしても、我々はあくまで未来が我々の努力に於てあるということを忘れてはならないのである。

―あとがき―

トインビーの歴史觀について私は私なりの見解を述べてみたのであるがこれがどこまで支持されるかは疑問である。それに一冊の著作で彼の史觀を完全に把握することは不可能でもあった。彼は現在大著 *History* の敘述に専心しているとのことである。私も今後彼に関する研究を怠らないつもりである。最後に私事にわたることではあるが此の稿を終えるにあたって私は私の親友森本巖君に心から感謝の念を捧げずにすませることは出来ない。数回にわたる彼の痛烈な批判と暖かい援助なくして私はここまでこれを纏め得ることは不可能であつた。此の論文に少しでもいい所があるとしたらそれは凡て彼の力に負うものである。

(一九五三・十二・十八)